

## 「山ふみ」と「山めぐり」——古典文学と山林修行——

西 耕 生 (愛媛大学法文学部教授)

**Yamafumi\* and Yamameguri\*\*****:Classical Japanese Literature and Ascetic Training in the Mountains****Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University****Kosei NISHI**

\*cautiously walking at a perilous place

\*\*making a pilgrimage to the mountains

*Hechi* (へち), the origin of the word *henro* (遍路), means dangerous terrain facing the shoreline around Japan. The reason why mountains have been chosen since ancient times in Buddhism as a place to train at is because the sutras state to, "enter deep into the mountains and visualize the heart of the way of Buddha." Thus, in order to participate in ascetic training called *tosō* (抖擻), which is to remove all desires and strengthen one's mind and body, one cannot ignore *hechi*.

In *Shōryōshū* (性霊集 pub. around 830) it states that when *Kūkai* (空海) was young he visited the rivers and mountains that he liked. In the *Sandai-jitsuroku* (三代実録 pub. 901) it states that when a priest called *Sanshū* (三修) was young, he shaved his head, become a monk and travelled on foot to various famous mountains. It also states that the retired emperor *Seiwa* (清和上皇 850-880) visited various well-known mountains. For each reference a different word was used to describe "travelling to mountains on foot."

Other words in historical texts were used for this action, but in literary works published during the Heian period when *kana* was used soon *yamafumi* (山ふみ) became the set word. For example, the *yamafumi* of Emperor *Uda* (宇多法皇 867-931) is recorded in the *Gosen-Wakashū* (後撰和歌集 pub. 951) and *Yamamo Monogatari* (大和物語 pub. 10<sup>th</sup> century). As well, the *Tale of Genji* (源氏物語 pub. around 1010?) uses the word *yamafumi* to describe women who went to worship at *Hase* (初瀬) in Nara prefecture as well as noble men who rode horses through *Kohata* (木幡) to reach *Uji* (宇治). As a large theme prevalent throughout the literary works during the Heian period, we can clearly see a different pattern in the meaning of *yamafumi*. Now it was a way to renounce worldly desires.

In the *Tale of Sagoromo* (狭衣物語), which was compiled during the late Heian period, General *Sagoromo* - the hero of the story - in one text used the word, *yamabe* (山べ [= 山辺]), but in another text wrote, *yamakaheri* (山かへり [= 山返]). When one considers the situation of using *waka* during this period I believe that *yamameguri* (山めぐり [= 山廻]) should have been used in those places. In Japanese literary works during the Middle ages such as a *Noh* (能) song, *Yamamba* (山姥), the phrase of "making a *yamameguri* in the drizzle" was included as part of a *waka* and was repetitively sung by people on their way to worship at *Zenkōji*.

Thus, during the late Heian period, the Japanese words of *yamafumi* and *yamameguri* were used to describe ascetic training in the mountains.

## はじめに——本稿の概要

「遍路」の語原である和語へちは、日本列島各地の水際に臨んだ急峻な地勢を意味する。古来、仏道修行の場に山が選ばれたのは、法華経序品や求聞持法などに説くごとく文字どおり「実践」を行なうためである。身心を修練して欲望を払いのける抖擻(頭陀)の修行場に、へちは不可欠であった。「少年ノ日好ンデ山ヲワ渉覽」した空海をはじめ(性霊集巻九)、三代実録には「少年之時落髮入道シ名山脚歴」した沙門三修や、

落飾後「名山佛壠歴覽」する「頭陞」を行なった清和上皇の事績などが記録されている。

このほか〔経行／経廻／巡覧〕などと記す漢文体の史書に対し、平安期の仮名文においては「山ふみ」と熟した名詞で記された。宇多法皇の「山踏み」を伝える後撰和歌集と大和物語。徒歩による女性の初瀬詣や、乗馬した男性貴族の木幡越の宇治行を「山踏み」と記す源氏物語。かくて、平安文学を覆う大きなテーマとして、「山踏み」のその先に煩悩の要因をなす異性がいるという範型が観て取れる。

平安後期の狭衣物語には、主人公を「山辺の大將」と綽名する箇所「山かへりの大將」と作る異文が見える。古今所収歌に基づいた要語「見えぬ山路」が頻出する場面展開と伝本の書記様態から、「山べ(=山辺／山遍／山返)」とはむしろ「山かへり(=山返)」を介して「山めぐり(=山廻)」とあるべき箇所だと見透される。平安中期に溯る歌材「山めぐりする時雨」を先蹤とする連歌の付合や、善光寺参詣の途次「時雨」とともに「山廻り」として印象深く繰り返す謡曲《山姥》なども支証となる。中世になると、山林抖擻に対応する和語として「山踏み」のほか「山廻り」も盛行されたことがわかる。

## 1. 漢文体資料の表現

### 1. 1. 仏道帰依と深山修行

空海が高野に行場を開こうとした動機の一つには「少年」の頃から「好シテ山水ヲ渉覽」していたことがある。彼が見出したのは、四面に高嶺を擁するゆえ人跡まれで蹊も絶えている「平原幽地」であった。

沙門空海言。……空海少年日。好涉覽山水。從吉野南行一日。更向西去兩日程。有平原幽地。名曰高野。計當紀伊國伊都郡南。四面高嶺。人蹤絶蹊。今思。上奉爲國家。下爲諸修行者。芟夷荒蕪。聊建立修禪一院。……〔續遍照發揮性靈集補闕抄卷第九・94「於紀伊國伊都郡高野峯被請乞入定處表」弘仁七年(816)六月十九日(日本古典文学大系本396～398頁)〕

この上表とおなじ結構を有するかと認められるのが、三代実録に収める沙門三修の申牒である。

〔陽成天皇元慶二年(878)二月〕○十三日己卯。詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺。列於定額。沙門三修申牒稱。少年之時。落髮入道。脚歷名山。莫不周盡。仁壽年中(851～854)。登到此山。卽是七高山之其一也。觀其形勢。四面斗絕。人跡希至。昔日深草(仁明)聖皇。令建一精舍。修藥師念佛。三修居止以降。歲月漸積。堂舍有數。誠非雲構庶幾靈山。望請天慈。賜預定額。故從其所請。〔三代実録卷卅三(新訂増補國史大系本・後篇421頁)〕

近江國坂田郡の護國寺を定額に列する所以は「七高山\*」の一つである伊吹山が四面途絶して人跡きわめて希な「形勢」をもっていたこと。そして仁明天皇が当地に三修をとどませたのは、彼が空海と同じくやはり「少年」時から名山を「脚歴」し「周盡」する豊富な経験を有していたことに拠る。このほか史書によれば以下のごとく、和朝臣宅継が若狭國比古神社の神主となるのを辞そうとして検じた古記や、嵯峨天皇の子であった沙門素然の卒伝などに、仏道帰依のため山中で修行したとの記事が見受けられる。

〔注〕\*七高山=承和三年(836)近江比叡・比良、美濃伊吹、山城愛宕、攝津神峯、大和金峰・葛木  
なお、玉勝間十三「七高山といふこと」にはこの名称の根拠として三代実録当該条を引く。

〔類聚國史卷百八十・佛道七・諸寺〕(淳和天皇天長)六年(829)三月乙未。若狭國比古神。以和朝臣宅継爲神主。宅継辞云。據檢古記。養老年中(717～724)。疫癘屢發。病死者衆。水旱失時。年穀不稔。宅継曾祖赤磨。歸心佛道。練身深山。大神感之。化人語宣。此地是吾住處。我稟神身。苦惱甚深。思歸依佛法。以免神道上。無果斯願。致灾害耳。汝能爲吾修行者。赤磨卽建道場。造佛像。号曰神願寺。爲大神修行。厥後年穀豐登。人无夭死云々。

〔文徳天皇仁壽二年(852)十二月二十日〕辛巳。天台沙門素然卒。沙門者。嵯峨太上天皇之子也。賜姓源朝臣名明。性甚朗悟。天皇好文書。欲教諸子皆有才學。……從初承勅。勉勵弥切。諸子百家。略以閱覽。晏駕之後。哀慕感恨云。誰爲爲之。不遂其業。歸心佛道。離遠俗塵。遂爲沙門。終于山中。時人高其節操。皆以感慕。〔文徳実録卷四(新訂増補國史大系本42～43頁)〕

古代仏教における山林修行とその意義については、夙く、藪田香融博士をはじめとする日本古代史の業績が具わる。藪田博士は求聞持法を例に、修行場に共通する要件について次のように論及せられた。

「求聞持法」の分別処法によれば、空閑静処・浄室・塔廟・山頂・樹下という五つの条件が列挙されている。吉野川を眼下にのぞみ、幽邃な深山にかこまれ、さらに虚空蔵の透彫を鑄付けた塔のある比蘇山寺は、求聞持法の修法場として、最も好適な地理的環境にあった。〔……中略……〕

しかしながら、このことを逆にいえば、これらの条件さえ備えていたならば、求聞持法の修法は、何も比蘇に限られていたわけではない。事実、比蘇山寺と無関係に求聞持法の行われた事実も少なからず見出されるのである。

もっとも著名なのは、弘法大師空海の求聞持修法であろう。『三教指帰』序には、空海みずから次の如く述べている。〔……以下略……〕

〔藪田香融「古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめぐる—」  
『平安佛教の研究』法蔵館（昭和56年）41頁〕

本稿では国語国文学研究の立場から、その内実や具体相でなく、もっぱら山林修行に関する記載の形相をめぐっていささか考察をめぐらせてみたい。

## 1. 2. 清和上皇の仏道修行

幼少の即位ゆえに初めて人臣の摂政が置かれた清和天皇が讓位後仏道修行に勤めたことは、よく知られている。三代実録元慶四年（880）十二月四日条に載せる崩御の記事に拠れば、以下のごとくである。

是日。申二刻。太上天皇崩於圓覺寺。時春秋卅一。……僧正宗叡法師。入唐求法。受得眞言。奉勸天皇。結香火之因。自遜皇位。御清和院。歸念苦空。發心菩提。朝夕之膳。菜蔬在御。妍狀豊姿。不賜顔色。嫉私寵引。自斯而斷。遂御山庄。落飾入道。是時僧正宗叡侍焉。山庄即是圓覺寺也。天皇寄事頭陁。意切經行。便欲歷覽名山佛壠。於是始自山城國貞觀寺。至于大和國東大寺。香山。神野。比蘇。龍門。大瀧。攝津國勝尾山諸有名之處。經廻礼佛。或處留住。踰旬乃去。自勝尾山。歸於山城國海印寺。俄而入丹波國水尾山。定爲終焉之地。自後不御酒酢塩豉。隔二三日。一進齋飯。六時苦修。焦毀如削。斷除業累。禪念逾劇。恆厭此身。欲不御膳而捨之。至夫沙門修練者所難行。緇徒精進者之爲高迹上。雖尊居極而盡蹈之矣。寢疾大漸。命近侍僧等。誦金剛輪陀羅尼。正向西方。結跏趺座。手作結定印而崩。震儀不動。儼然若生。念珠猶懸。在於御手。梓宮御棺。其制同輿。以聖躬坐崩遂不頽臥也。遺詔火葬於中野。不起山陵。……

山莊たる円覺寺での「落飾入道」後、抖擻（頭陀）に勤めた太上天皇の「經行」「經廻」の具体は、「名山仏壠」の「歴覽」また「諸有名之處」に至り「礼仏」することであった。讓位後近侍して円覺寺での「別落入道」を引導した僧正宗叡の卒伝にも「山城大和摂津等国名山仏寺」を「太上天皇巡覽」したと記される（三代実録元慶八〔884〕年三月廿六日条）。漢文体資料において山林修行は、前節でふれた沙門による山水「涉覽」や名山「脚歴」のほか、名山仏寺の「經行」「經廻」或いは「歴覽」「巡覽」などと表現される。

## 2. かなふみの表現

### 2. 1. 宇多天皇の「往日素懐」——三宝への帰依

宇多天皇が仏道に帰依したその深さは、扶桑略記所引御記に遺された記事から読み取ることができる。

仁和五年（889）己酉正月。天皇話談。曰往日素懐。御記云。朕自爲兒童。不食生鮮。以歸依三寶。八九歳之間。登天台山。修行爲夏。爾後。每年往詣寺々。修行至二十七歳。言中宮（母班子）可爲沙門狀。荅曰。此極善也。大原寺有練行法師應俊者。爲彼法師。裁縫細紵裝束并袈裟。先可與耳之。後日又荅曰。善哉。善哉。好三寶事。雖然。暫見盡世間。須修此事。經三四月。復如是事。未得有妻子。可也。若住于世間。斷煩惱。是難耳。荅曰。諾。然敢不肯許。後四個月。大臣持鳳輦。奉迎先帝。愚心偷以悚戰。未及復奏。歷四個月。傳此寶位。……〔扶桑略記第廿二（新訂増補國史大系第十二卷157頁）〕

「天皇話談」として記された「往日素懐」——物心つく時分から殺生を好まず三宝に帰依しながら、少年の頃には登山や寺詣の修行に勤め、17歳になり初めて沙門になりたいと母にうち明けたところ、その素懐を受け容れつつ「暫ク世間ヲ見尽クシテ」からでも遅くはないと鷹揚に構える母に随っているうち、登極する機会にめぐり合わせる事となったという。踐祚から即位に至る過程でその輔佐として大きな役割を担った太政大臣藤原基経に遣送した勅書からも、俗世出離の素志が察せられる。

仁和三年（887）丁未八月廿六日丁卯踐祚。于時年二十一。小松〔光孝〕天皇第七子。母。皇太后源班子。贈太政大臣一品仲野親王女也。桓武天皇第十二子也。○廿八日己巳。太政大臣〔基経〕奉勅。令



左大弁橘廣相。左中弁藤有穂。左近衛權中將時平。左衛門佐藤高經等侍殿上。……○（同年十一月）十七日丙戌。即位。辰一剋。駕御鳳輦。出東宮。南行幸八省。御小安殿。二剋。關白太政大臣參上。四刻出大極殿。即于帝位。……即送勅書於太政大臣云。今日之夏。平安令果。歡喜無涯。先有遺託之命。況余已爲孤子。而思隨教之命耳。如此之言。若有辭退。更亦不住世間。小子不攝世間之政。拋小君之号。迹隱山林。是所念也。（已上御記）

〔扶桑略記第廿一・宇多天皇（新訂増補國史大系本 153 頁）〕

前帝たる父の遺託の命に随うただけで、もしも基経の後ろ楯が無かったなら、自分は「世間ニ住マハズ」「山林ニ逃ゲ隠ル」よりほかなかったであろうという。重臣たる基経に対する気遣いを割り引いてもなお、その素志の片鱗が顕われていると見てよいであろう。かかる意思を懐いていた宇多天皇は、周知のごとく、寛平九年（897）七月三日東宮（子である次帝醍醐）の元服に併せ讓位するとともに落飾後たびたび各地の寺社に御幸した。延喜七年には、水陸兩路を使い紀伊熊野神社にまで赴いたとの記録も伝えられている。

〔延喜七（907）年十月〕十七日辛酉。及夜。仲平朝臣自紀伊國來復命。法皇以去十一日。自切尾湊御舟。赴向熊野神社。其日。爲報道中消息。有仰令還來。但傳聞。進御道中。泛海傍山。其路甚難。云々。〔扶桑略記第廿三（新訂増補國史大系本 177 頁）〕

## 2. 2. 「山踏み」する人々——「へちふむ」との対照

このような宇多法皇の事蹟を、後撰和歌集や大和物語には次のごとく伝えている。

㊶ 法皇、寺めぐりし給ひける道にて、楓の枝を折りて 素性法師

この御幸ちとせかへでも見てし哉かかる山ぶし時に合ふべく〔後撰和歌集卷第十五・雑一・一〇九二〕

㊷ 法皇はじめて御ぐし下ろしたまひて山ふみし給あひだ、后を始め奉りて女御・更衣猶ひとつ院にさぶらひ給ける、三年といふになん、みかど帰りおはしましたりける、昔のごと同じ所にておほむ下ろしたまうけるついでに 七条の後

〔後撰和歌集卷第十五・雑一・一〇九七詞書〕

㊸ 法皇とほき所に山ふみしたまうて、京に帰り給ふに、旅宿りしたまうて、

御供にさぶらふ道俗、歌よませ給けるに 僧正聖宝〔後撰和歌集卷第十九・羈旅歌・一三六二詞書〕

㊹ 山ふみし始めける時 僧正遍昭

〔後撰和歌集卷第十七・雑三・一二三八詞書〕

㊺ 御門おりみ給ひて又乃年の秋、御くしおろし給ひて、ところ／＼に山ふみし給ておこなひ給氣り。

〔愛媛大学図書館蔵鈴鹿本大和物語・二段（和泉書院影印叢刊 28 に拠り私に句読を施した。）〕

許されて法皇の「寺巡り」に供奉する自らを「山臥」と卑下しながら、その「時に合ふべ」き喜びの弥栄を寿ぐ素性法師の用例㊶のほか、㊷㊸㊹の「山踏み」はすべて法皇の修行をいう。遍昭を主語とする㊹も併せて「山踏み」が、史書に記された名山仏寺の「経行／経廻／歴覽／巡覽」などに対応する語であることが容易に確認されよう。特に㊹の一節をめぐっては、かつて北村季吟が以下のように注している。

ところ／＼やまぶみし志てとハ○山中にいる事也。法-花-經序-品云○入-於深-山-思-<sup>ニク</sup>惟-佛-道-云云。<sup>ユイスト</sup>

後撰集詞書に○やまぶみ志てミとせといふにミかとかへらせ給ふと阿り。延喜年中に○高野熊野などに御幸の由侍れば○是らの時坎〔大和物語抄（北村季吟古註集成 5、新典社、23～24 頁）〕

文字どおり「実践」する経験をこそ喚起すべき「所々山踏みして」を「山中に入る事也」と説きなす点にはやや行き届かぬ印象を覚えるけれど、「深山ニ入り仏道ヲ思惟ス」べしと説く法華經序品の教えに基づくとする指摘は肯なわれよう。加えて、細かいながらこの語が名詞として熟した形を持つ点にも留意したい。

蜻蛉日記には、比叡を臨む「奥山」に物詣する様子を叙した次のような一節がある。

ある所に忍びて思ひたつ。「なに許深くもあらず」と言ふべき所なり。野焼きなどする頃の、花はあやしう遅き頃なれば、をかしかるべき道なれど、まだし。いと奥山は鳥の声もせぬものなりければ、鶯だに音せず、水のみぞめづらかなるさまに涌き返り流れたる。いみじう苦しきままに、かからである人もありかし、憂き身一つをもてわづらふにこそはあめれ、と思ふ思ふ、入相つくほどにぞ至りあひたる。み明かしなど奉りて、ひととき立ち居するほど、いとど苦しうて、夜明けぬと聞くほどに、雨降り出でぬ。いとわりなしと思ひつつ法師の坊に至りて、「いかがすべき」など言ふほどに、ことと明け果てて「蓑、笠や」と人は騒ぐ。我はのどかにて眺むれば、前なる谷より雲しづしづと上るに、いとも悲し



うて、思ひきや天つ空なる雨雲を袖して分くる山踏まんとは とぞおぼえけらし。

〔蜻蛉日記下・天延二年（974）二月〕

横河を詠んだ「なにばかりふかくもあらず世中のひえをも山と見きく成けり」（愛媛大学図書館蔵鈴鹿本大和物語四三段）と、「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（古今集恋歌一）の二首を引き踏まえる修辞と相俟って、「涌き返り流れたる」水の存在や「前なる谷」が眺められる「奥山」の様子は、あたかも沙門空海が「涉覧」した「山水」のイメージを彷彿させようか。「山林抖擻には「山ぶみ」の語が対応するのであろう」（東京堂出版『源氏物語事典』上巻535頁）。道綱母の述懐歌の末句「山踏まんとは」すなわち深山修行を表わす名詞「山踏み」を〔山-踏ム〕と分節した措辞にほかなるまいと思われる。

なお、和泉式部日記に「日頃は山寺にまかりありきてなん」と作るのをはじめ、

山寺にあるく人にやる

世を憂しと山に入るひと山ながらまた憂き時はいづちゆくらむ〔西本願寺本躬恒集・五三〕

という詞書の用例のごとく、仮名文には〔山寺-ニ-歩ク〕といった言い回しが見とめられる。躬恒の歌に即してみれば、「世を憂しと（観ジテ）山に入る」その結果「山ながら」に在る状態が、詞書にいう「山寺に歩く」状態である。さきの用例⑦の「寺巡り」がこれとほぼ同義であることに思い到るであろう。そして〔山-歩ク〕という言い回しもこの延長にあると考えられる。

……まして験者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かからぬ山なくありくほどに、恐ろしき目も見、しるしあり、聞こえ出できぬれば、ここかしこに呼ばれ時めくにつけて、やすげもなし。

〔能因本枕草子「思はむ子を法師になしたらむこそは」の段（小学館版日本古典文学全集11、69頁）〕

ここにおいて、現代語の複合名詞「山歩き」が〔山-ヲ-歩ク〕と分析しうる格関係を内在するかと思われるのに対し、古語「ありく／あるく」に照らすと、ニ格をとる相違に気づかされる。

**あり・き【歩き】** ㊦〔四段〕《あちこち動きまわる意。犬猫の歩きまわること、人が乗物で方方に出かけてまわることにもいう。平安女流文学で多く使い、万葉集や漢文訓読体ではアルキを使う。類義語アユミは一步一步足を運ぶ意》〔『岩波古語辞典 補訂版』72頁（1990年2月補訂版第1刷）〕

したがって「入山」や「籠山」あるいは「棲山」は、山（寺）にアリク——「あちこち動きまわる」移動の様態をいわば捨象した語であると把握されよう。これに対して古語「山踏み」の場合、そこに含まれる動詞「踏む」に注意すれば、「一步一步足を運ぶ」アユムの語義に相渉るように思われる。うつほ物語には、東宮へのあて宮入内決定の事を知った懸想人たちが「惑ひ焦らるる中に」その年の流行病も与かって「春の初めより、人つつしみて御嶽熊野詣、やんごとなき上達部おりたちて山踏みし給へる年」であったという作中人物の詞が見える。「直接身を入れてする」主体性能動性をいう「おりたつ」とは元来「降りて（直接地面に）立つ」意を表わす用言なのであった（『岩波古語辞典 補訂版』263頁）。以下に掲げる平安末期の歌、

やまふみのいはねかきわけゆくよりもくるしきものは恋路なりけり

〔文治二年（1186）十月廿二日 太宰権帥経房歌合・恋・九番左・一五三、有経〕

この初句に据えられた「山踏み」も、単なる山中の移動を表わす次元にとどまるまい。「磐根かき分けゆく」修行の「苦しき」実態を「恋路」に見立てる趣向から、一步一步「おりたちて」踏みしめる動作を表わしているものと捉えなければならぬ。時代が下り、連歌の付合においてもその語感は保たれているように思う。

磯トアラバ、

岩ね 山 松 千鳥 へちふむ みるめかる

しほみてば入ぬる磯の草なれや見らくすくなくこふらくのおほき

〔連珠合壁集・九 海 邊・100（中世の文学『連歌論集一』三弥井書店、昭和47年4月、51頁）〕

「磯」の付合として「岩根」「山」と並んで挙げられる「へちふむ」も、「山踏み」の語義を考えさせる有力な傍証となろう。名詞形「へちふみ」が見出だしえぬところから、両者の語性も異なるかと臆測される。

なみかくるへちにちりしく花のうへをこころしてふめはるのやまぶし

〔為忠家後度百首・桜廿首・七六「浦路桜／兵庫頭仲正」。なお夫木和歌抄卷第四・春部四・一四四六

「浦路桜／同（源仲正）」の第二句に作る「つち」は本来「へち」とあるべき本文。〕

やまぶしのいそのへちふむ真砂地をいかばかりとかあしたゆくくる

〔新撰和歌六帖第三帖・いそ・一一九三、九条三位入道知家〕

いまぞわれあらいそ岩のたかなみにへちふみかねて袖ぬらしつる

〔新撰和歌六帖第三帖・いそ・一一九五、弁入道光俊〕

「荒磯岩の高波」で山臥が「踏みかねて」しまうような「波かくる」「磯のへち」とは、「心して」歩を進めなければならぬ難所にほかならない。これらは、動詞「踏む」で表わされる苦難の経験を如実に喚起すべき歌々なのである。

## 2. 3. 源氏物語の「山踏み」——通説に対する異見

かくして、源氏物語に見える二例の「山踏み」を「ただし山歩きという程度の意で使われている」（東京堂出版『源氏物語事典』上巻535頁）と説く従来の解説も改めたほうがよいように思われる。

A. (初瀬カラ帰京シタ右近ハ光源氏ニ)「まかでて七日に過ぎ侍りぬれど、をかしき事は侍りがたくなむ。

山ふみし侍りて、あはれなる人をなむ見たまへつけたりし」「なに人ぞ」と問ひ給ふ。

〔玉蔓（源氏物語大成校異編742頁。ただし引用に際して適宜表記を改めた。）〕

初瀬詣から帰京した侍女右近が参詣の途次偶然に見つけた「あはれなる人」すなわち亡き夕顔の遺児玉蔓のことを、光源氏に伝えようとする場面である。物語に赴いたことを右近が「山踏みし侍りて」と口にしてある点に注意したい。右近と玉蔓とが邂逅する経緯は、以下のごとく、きわめて具体的に叙せられていた。

（姫君ニ言寄ル肥後大夫監カラ逃レヨウト、乳母ハ長男豊後介ヲ「頼もし人」ニ上京シ、姫君ノ開運祈願ノタメ驗灼カナ初瀬ニ参詣スベク）からうして、椿市といふ所に（京ヲ出テ）四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせでいき着き給へり。歩むとも無く、とかくつくろひたれど、足のうら動かれず、わびしければ、せむかた無くて休み給ふ。この頼もし人の介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など三四人、女ばらある限り三人、壺装束して、樋すましめく者、古き下衆女二人ばかりとぞある。いとかすかに忍びたり。大御明かしの事など、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。家あるじの法師、「人宿し奉らんとする所に、なに人のものし給ふぞ。あやしき女どもの、心にまかせて」と、むつかるを、めざましく聞くほどに、げに、人々来ぬ。これも徒歩よりなめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女、数多かめる。馬四つ五つひかせて、いみじく忍びやつしたれど、清げなる男どもなどあり。法師は、せめてここに宿さまほしくして、頭搔きありく。いとほしけれど、また宿り替へむもさま悪しくわづらはしければ、人々（先着シタ豊後介一行）は奥に入り、ほかに隠しなどして、かたへは片つかたに寄りぬ。軟障など引き隔てておはします。この来る人も恥かしげも無し。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。さるは、かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなき交じらひのつきなくなりゆく身を思ひ悩みて、この御寺になむたびたび詣でける。

〔玉蔓（源氏物語大成校異編723～733頁）〕

波線箇所から、両一行とも「徒歩より」の参詣であったことがわかる。京から椿市まで足かけ四日にわたる道程の、豊後介一行のとくに女の足にはつらかった様子が「生ける心地もせでいき着き給へり」に続く一連の叙述からうかがえる。「歩む」「足のうら」も「動かれず」致し方なく休息せざるをえなかったとは「山踏み」の苛刻な行程を活写しているであろう。

B. (浮舟トノ別レヲ惜シミツツ勾宮ハ) 我にもあらで出で給ひぬ。(御供ノウチ大内記ト時方ト) この五位二人なむ、御馬の口にはさぶらひける。(木幡ノ) さかしき山越え出でてぞ、おのおの馬には乗る。

水際の氷を踏みならず馬の足音さへ心細くもの悲し。昔も(宇治へ赴ク) この道にのみこそは、かかる山ふみはし給ひしかば、あやしかりける里の契りかな、と思す。〔浮舟（源氏物語大成校異編1881頁）〕

浮舟のいる宇治から木幡の山越で帰京する勾宮主従一行の様子を画く場面に配された「山踏み」もまた、単なる山歩き程度の意でないことは容易に察せられよう。愛人との惜別に腑抜けた様子の主人を乗せた「御馬の口」を従者として二人がかりで御しながら「さかしき山越え」を果たして初めて、彼らも「おのおの馬には乗る」——京から木幡越の「山踏み」、女の待つ宇治への道は、馬から下りて自らの足で歩まねばならぬ恋路にほかならない。ここに「山踏み」するその行く先に愛執の要因となる異性がいるという、皮肉な、つくり物語の構図が見透されるのである。

## 3. 狭衣物語本文改訂私按

### 3. 1. 「山辺の大將」異見

平安後期のつくり物語、狭衣物語には、幼少より「ひとつ妹背」のごとく育った従妹源氏宮を心ひそかに

慕う主人公が登場する。巻二になると彼は、女三宮降嫁の縁談に困惑する一方、一条院崩御による新帝即位に伴って賀茂斎院に卜定された源氏宮に、自ら恋情を直訴するに至る。彼が「山辺の大將」と綽名される以下の場面には、引歌表現と相関して注意すべき本文異同が見とめられる。

(女三宮降嫁ノ縁談ニ困惑シタ狭衣ハ) これやさは、【a】見えぬ山路のしるべなるらんとおぼえ給ふ。……〔中略〕……(斎院ニ卜定サレタ源氏宮ニ恋情ヲ直訴スル狭衣ハ)「いでや、今はとてもかくても同じさまにて世に侍るべきにもあらねば、【a'】見えぬ山路も諸共にや、とさへこそ思ひ侍りぬれ」とさへ宣給ふ。……〔中略〕……宮司参りて、御祓つかうまつりて、榊青やかに挿しつれば、(神域ノ境界ガ張ラレ)いとわづらはしうなるを見るも、(狭衣ハ)心感ひのみしてうち休むことおぼえず。やがて【a"】見えぬ山路にも隠れなまほしきに、「大將の、御とのみ所さぶらはれんこそ良からめ」など(父)殿の宣給ふを聞くも、(斎院トナツタ源氏宮ヲ恋イ慕ウ私ノ)かかる心のうちをば知り給はで、あるべきものと思したるこそあはれなれ。(私ガ失踪シタラ父殿ハ)いかばかり思し惑はん。限りあらん命なりともいかが、と思ひ続け給ふには、また、引き返しやるかた無きに、ひとかたならずさへ悲しうて、【b】「心こそ野にも山にも」と言はれ給ふは、いかなるべき御ありさまにか、山辺の大將とも言はれ給ひぬべかめり。そののち、今日や明日やと人知れず【c】山のあなたに御心あくがれて、いづこにも心のどかにおはせねば、殿にも(源氏宮ガ)居させ給ひし御方を見給ふに、ゆゆしきまで亡くなりたらん人の跡を見んやうに、恋しう悲しくのみ思さるれば、さらに参りも寄り給はず。

〔深川本狭衣物語巻二(新編日本古典文学全集本① 265～287頁)〕

〔校異〕

6〇其後は一山へ(へーかへる鈴一かへり雅為四宮武東竜大瀬一かへるくり>陵一かつ中)の大將とも(とも一なとん瀬)いわれ給ぬへかめり(給ぬ……り一ぬへし為四宮一ぬへかめり武一給ふへかんめり大)そのゝちは(そのゝちは一そのゝち深鈴一とのゝ相)深鈴相為四宮武大瀬一そのゝち前押  
 箇所ナシ(元和古活字本)〔元和古活字版を底本とする中田剛直編『校本狭衣物語巻二』桜楓社(443頁)を参照した。なお、元和古活字版の本文様態を末尾に加え掲げた。〕

深川本に「山へ」とある箇所を「山かへり(山かへる)」と作る諸本のほか、「山かつ」と作る一本や、この呼称を含む一節を持たぬ元和古活字本のような異文まで知られる。本文を欠く古活字本は措いて、いま、異同を考察する端緒として深川本本文に拠った新編全集の注解を掲げると、以下のとおりである。

素性の歌によってあだ名をつけたら、の意か。為家本・為明本「山かへりの大將」。素性は山辺まのの道の最北端、石上いさみの良因院に止住した。〔新編日本古典文学全集本① 286頁頭注二〕

上掲の引用本文に波線を施した素性の歌をふくめ、問題となる異文を有するこの場面には、複数の古今歌が象嵌されている。

【a】世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆しなりけれ

〔古今和歌集卷第十八・雑歌下・九五五、物部良名〕

【b】いづこにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも感ふべらなれ

〔古今和歌集卷第十八・雑歌下・九四七、素性〕

【c】み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ処にせん

〔古今和歌集卷第十八雑下・九五〇、よみ人しらず〕

親への孝心が頭をよぎるものの、源氏宮への叶わぬ恋が募るあまり「人間 ヨノナカ」(観智院本類聚名義抄法下39ウ)を厭い心穏やかにいらぬ狭衣。三度にわたり踏まえられる【a】を基調に据え、主人公自身の口をとおして【b】の歌句をあらわに引きつつ、俗世出離の志向から「山のあなたに」「隠れ処」を求めようとする【c】へと展開する叙述である。引用末尾の破線箇所は、

流布本・慈鎮本など「内裏にもさらに参り寄り給はず」。出仕も止めてしまったことになる。為家本「内にも入り給はず」なら、寝殿の屋内に入ることは、あれつきりなさらなかった、の意で深川本などと同義。

〔新編日本古典文学全集本① 287頁頭注三〕

と注される異文の存在も慮るなら、この場面は「世の憂き目見えぬ山路へ入らむ」と思ひめぐらす狭衣の心のありようを象っていくものと目されよう。とすれば「山かへり」とする本文はその主旨にふさわぬのではないか。かといって深川本のような「山辺の大將」という綽名も、実際に出仕を止めてしまうのが引用末尾になって明かされるところから、やはりそぐわぬ印象を覚えるのである。



あらためて場面全体を見わたしてみれば、自然に口をついて出る隻句として配された【b】の歌句は、主人公の心に焦点を絞る趣向だと把握されよう。引歌を駆使しながら、源氏宮への叶わぬ恋という「絆し」に纏われて宮仕えの身ながら「心こそ野にも山にも」惑い「山のあなたに」まで「あくがれて」都の「いづこにも心のどかにおはせぬ」姿が浮彫されていく。このような叙述展開からは、ままたらぬ身に対して「心こそ」「あちこち動きまわる」様態が想察されるのではあるまいか。ここに本稿は、以下のごとき本文転訛の経路に考え及ぼす。

想定本文「山廻」：山めぐり⇒ { 廻、迴、迴、迴、…… }	—	
	// 《書体ノ混同》	/めぐり/
深川本「山辺」：山へ ⇒ { 辺、邊、遍、返、…… }	//	《かなの連綿》
	// 《書体ノ混同》	/かへり/
諸本「山帰」：山かへり⇒ { 返 }	//	《誤脱／意改》
	// 《書体ノ混同》	/かつ・/
中田本「山賤」：山かつ	—	

元々「山めぐり」と作っていた本文が、いつの頃にか「めぐり」の漢字表記あるいは異体かな表記による書体の混同をとおして[へ]の異体かな[辺/邊/遍/返]へと転訛した結果「山へ/山返」へと、或いは、かなの連綿を介して[めぐり→かへり]と転訛したと考える蓋然性である。「山めぐり」——現存本にはもとより見えぬけれど、「心あくがれ」る主人公の表象としてすこぶるふさわしいかと思われる。

### 3. 2. 「山めぐりする時雨」——中世文芸の表現類型

いわゆる中世王朝物語においても、主人公が意中の異性に対する叶わぬ恋にとらわれて隠遁を思いめぐらすといった趣向は通例であったと思しい。

- (中納言ハ) 行方も知らず果てもなき御思ひどもの、ひとかたならず御心をくだきてながめ過ぐし給へば、遊びなどもあへなくなりたる頃なり。久しく内などへも参り給はず。からうして参り給へれば、台盤所の方に、人々めづらしがり、例ならず聞こゆれば、「かくや思しめすと、程侍るものを。山のあなたの住まひも、なほえ思ひとまるまじき世にこそ」など宣給へば、三位の中将をこそ山踏みとかや世には申すなれ。同じ御心にや侍るらん、それも見え給ふことかたくのみ侍りて、九重のうちすさまじくて、同じ山路を尋ぬる若き人々侍りなんと聞こえ合はするに、少将の君とて色好める若き人、かやうの筋は思ひ寄りぬことに常は言ふを、「少将の君の祈り給ひけん山路こそ、遅れきこえじと待ち侍りつれ」と宣給へば……〔浅茅が露（中世王朝物語全集1・236頁）〕

前節に引いた【a】【c】のほか、古今集などに収める躬恒作の恋歌「我が恋は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」を冒頭に踏まえる趣向を凝らしながら、三位中将のことを「山踏み」と世称する、浅茅が宿。

- (恋路ノ仲介デ帥中納言女ト結婚シタ花染ハ) また、  
たれとともとまる心にひかれては今は嵐の山踏みもせず  
 と聞こえ給ふを、(恋路ハ) 笑ひ給ひつつ、「かくも言ひ迎へはする事か。入道おとど（戸無瀬入道）に絶え果てきこゆる世やはあるべき。  
住まばやのあらまし事の山の奥心の通ふ跡は絶えせじ  
 かやうにて、その年も暮れぬ。まことに恋路ゆかしき名にし負ひて、念なきほどに思ふさまなる所々の御心の中……明けても暮れても見まほしく、比翼連理の契りをかはしても起き憂かりける閨の隙……  
 〔恋路ゆかしき大将巻三（中世王朝物語全集8・107～108頁）〕

或いはまた「恋路」「花染」と通称される若公達二人が「山踏み」をめぐる歌を詠み交わす、この恋路ゆかしき巻三の場面は、巻一の以下のような記述を踏まえる。

- ④千世の数とらん滝の白玉の流れなればにや、身をば嵐の山風に誘はれて水の泡とも消えなんと（戸無瀬入道ガ）思ひ入りにし年月も、数ふれば十年余りにもなりにけり。川の方に向かひたる妻戸押しあけて眺めおはする折節、中納言中将・三位中将など、時雨に濡れ濡れおはしにけり。見つけきこえ給ひぬれば、まづうち笑まれて、めづらしう嬉しと思したるさま、いとあはれなり。

〔恋路ゆかしき大将巻一冒頭（中世王朝物語全集8・10頁）〕

## ⑩しるべある雲の懸け橋踏みもみず恋路ゆかしき我が心かな【恋路ノ作中歌】

〔恋路ゆかしき大将卷一（中世王朝物語全集8・28頁）〕

⑪かやうにいつ方も、恋路ゆかしき世の習ひにて思ふ事なきに、かの花染は、移ろふ色のみほどなくて、まことに染むる心もなし。〔恋路ゆかしき大将卷一（中世王朝物語全集8・102頁）〕

書名でもある措辞「恋路ゆかしき」が用いられた⑩⑪は二人の人物設定にかかわる叙述。翻って⑩は、中納言中将（端山）と三位中将（花染）とが戸名瀬入道のもとを訪れる作品の冒頭である。書き出しにはやはり古今所収の賀歌「亀の尾の山の岩根をとめて落つる滝の白玉千世の数かも」を踏まえ、入道の籠もる嵐山へと読み手を導く。ここで特に注目したいのが、「時雨に濡れ濡れおはしにけり」という時節の設定である。室町中期の連珠合璧集には「時雨」の付合の一つに「山めぐり」を掲げ、「山めくる」を「山めぐり」と作る異文もあるという（三弥井書店版『連歌論集一』37頁）。両語の親和性は平安中期に溯り、「山めぐりする時雨」を詠む①を先蹤として、中世の文学表現における常套の一つであったと考えられる。

左京大夫道雅一首

①もろともに山めぐりするしぐれかな ふるにかひなき世とはしらずや〔玄玄集・一五三／

三奏本金葉和歌集第四・冬・二六三「百寺をがみけるにしぐれのしければよめる 左京権大夫道雅」

詞花和歌集卷第四・冬・一四九「東山に百寺をがみ侍けるに時雨のしければよめる 左京大夫道雅」

勅撰集どちらも第四句「かひなき身」に作る。〕

「時雨を同行者にとりなし、時雨が止んでほしいとの気持をユーモラスに自嘲的に詠んだ」（新日本古典文学大系本詞花和歌集262～263頁脚注）一首の眼目が上句であろう。二度撰収された勅撰集の詞書に抛れば、この一首「百寺拜み」の寺巡りに時雨の「山めぐり」を掛けていること、明らかである。

以下、平安末期から鎌倉期にかけて「山めぐりする時雨」を詠みこんだ作例をいくつか掲げてみよう。

閑中時雨

②おのづから音する人ぞなかりける 山めぐりする時雨ならでは〔山家集上・冬・五〇二〕

(題しらず)

③しぐるれは山めぐりする心かな いつまでとのみうちしをれつゝ〔山家集中・雑・一〇三一〕

歌句をそのまま活かした②に対し、「山めぐりする心」に焦点化した③など、西行の工夫がうかがわれよう。

時雨の歌とてよみ侍ける

仁和寺後入道法親王〈覚性〉

④木の葉散るとばかり聞きてやみなまし もらで時雨の山めぐりせば

〔千載和歌集卷第六・冬歌・四〇五／出観集・五五三〕

時雨の歌とてよめる

前右京権大夫頼政

⑤山めぐる雲の下にやなりぬらむ 裾野の原に時雨するなり〔千載和歌集卷第六・冬歌・四〇八〕

法性寺入道前関白家歌合に

源兼昌

⑥夕づく日いるさの山の高根よりはるかにめぐる初時雨かな〔新勅撰和歌集卷第六・冬歌・三八五〕

しばし世を逃れて、大原山飯室の谷などに住みわたり侍ける頃、熊野御幸の

御経供養の導師逃れがたき催し侍て、都に出で侍けるに、時雨のし侍ければ、

横川の木の陰に立ち寄りてよみ侍ける

法印聖覚

⑦もろともに山辺をめぐむら時雨 さても憂き世にふるぞ悲しき

〔新勅撰和歌集卷第十七・雑歌二・一一五一〕

⑧染め残す木々の紅葉もあらじとて時雨は山をめぐむなりけり〔守覚法親王集・七七〕

「高嶺より遙かにめぐる初時雨かな」と詠み収める⑥、「諸共に山辺をめぐむ村時雨」と詠み始める⑦など、

①全体を本歌取した趣であろう。かかる取合せの典型として位置づけうるのが、謡曲《山姥》の詞章である。

〔ノリ地〕<sup>シテ</sup>暇申して 帰る山の<sup>地</sup>春は梢に 咲くかと待ちし<sup>シテ</sup>花を尋ねて 山廻り <sup>地</sup>秋はさやけき 影を尋ねて<sup>シテ</sup>月見る方にと 山廻り <sup>地</sup>冬は冴え行く 時雨の雲の <sup>シテ</sup>雪を誘ひて山廻り <sup>地</sup>廻りめぐりて 輪廻を離れぬ 妄執の雲の ちり積もつて 山姥となれる 鬼女がありさま 見るや見るやと 峰に翔り 谷に響きて 今までここに あるよと見えしが 山また山に 山廻り 山また山に 山廻りして 行方も知らずなりにけり〔新潮日本古典集成『謡曲集下』366頁に抛り、振仮名・曲節型・吟型等割愛した。〕

「山姥の山廻りするといふことを曲舞に作」り歌ったことに因み「百ま山姥」と異名をとった女曲舞が、善光寺参詣の途次、上路の山中で山姥から山姥の曲舞を所望される。月夜の深谷の曲舞を眼目とする」（前

掲書 501 頁解題) 主想をもつ本曲の最後に「時雨の雲」を伴って「山廻り」の語が繰り返される。これは、  
 紀路の遠山めぐりつつ [5 郭公] 苦屋はいかに浦めぐる [31 海路]  
 裾野をめぐれば伊吹山 [32 海道上] 磯路をめぐる浜の宮 [55 熊野参詣五]  
 深き谷地をめぐり [113 遊仙歌] 磯路をめぐる鹿の島 [154 背振山并]

[伊藤正義監修『宴曲索引』(索引叢書 52) 和泉書院 (2009 年 5 月) 参照]

などと綴られる宴曲の詞章など、芸能を含め中世の文化に広く浸透した表現類型のあらわれにちがいない。

嵐山に隠栖する入道を若公達が訪う恋路ゆかしき巻一冒頭に「時雨」が設定されていた理由もここに得心される。そうして本稿が、狭衣巻二に「山めぐりの大将」という本文を立てようとする基盤なのでもあった。

### おわりに——俗世出離と「恋てふ山」

若有<sub>レ</sub>辭退<sub>一</sub>。更亦不<sub>レ</sub>住<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>。小子不<sub>レ</sub>攝<sub>二</sub>世間之政<sub>一</sub>。抛<sub>二</sub>小君之号<sub>一</sub>。迹<sub>二</sub>隱山林<sub>一</sub>。是所<sub>レ</sub>念也。

御記にしろされた宇多天皇自身の即位にまつわる「所念」からは、「世間」と「山林」とを対峙させる通念がうかがわれる。が、此岸に生を享けたかぎり人は、憂き世の「惑ひ」からたやすく逃れえぬ現実にも逢着する。

山の法師のもとへつかはしける 凡河内躬恒  
 世をすてて山に入ひと 山にても猶うき時はいづちゆくらむ

[古今和歌集卷第十八・雑歌下・九五六 (新日本古典文学大系 5)]

述懐百首哥よミ侍ける時鹿の哥とてよめる 皇太后宮大夫俊成  
 世中よみちこそなけれ おもひいる山のをくにもしかそなくなる 〔龍門文庫蔵本千載和歌集卷第十七・雑歌中・一一五〇 (阪本龍門文庫善本電子画像集による。鎌倉末頃の写しで完本として最古の写本である該本を底本とする和泉古典叢書本に第二句「みちこそなけれ」とするのは誤植と見られる。)]

前者は、無量寿経上「入<sub>レ</sub>山学<sub>レ</sub>道」などを念頭に置きながら「出家の意の仏教語「入山」をふまえ」調べられた躬恒の歌である (以上、新日本古典文学大系本古今和歌集 287 頁脚注)。この一首と「奥山にもみぢ踏み分け」と詠む古歌と、「本歌二首をもてよめる歌」(井蛙抄)とする享受はそれとして、「世」の「道」の「無」さを述懐する有名な俊成の歌も、あらためて仏教語を強く意識して詠みなされた作であったと認識されるのである。

こひてへばしらぬみちにもあらなくに あやしくまどふわがこころかな  
 わりなくぞねてもさめてもこひらるる 心をいづちやらばわすれん  
 いかばかりこひてふやまのふかければ いりといりぬるひとまどふらむ

[古今和歌六帖・第四・恋・こひ・一九七八～一九八〇/なお一九八〇番の歌を再録する

万代和歌集卷第九・恋歌一・一七六三には、第三句「しげければ」に作る。]

ありふれた日常語として今後も使われるにちがいない基本語。だからこそ「恋」という「道」また「恋てふ山」とは、相反する現実と理念とを巧みに結び構えた比喻ではなかったか。かくて、相剋する現実と理想とを省察させる重要な契機の一つとして文学の古典は、現在そして未来の人々にも伝わっていくであろう。